



学校法人
鎌倉女子大学

ある卒業生からの手紙

沖縄在住の卒業生の方からお手紙を頂きました。自筆で綴られた便箋4枚を一読し、何とも言いようのない思いに満たされ、何度も読み返し、どうしても「学園だより」で紹介しておきたい、その方のご了解を得て、そのご文を掲載することにいたします。

特に本学と沖縄出身の卒業生たちとのご縁は、戦後間もなくの昭和20年代に^{さかのぼ}り、施政権の返還などということも夢のまた夢の時代、どうしても本土で勉強したいという篤い思いをもった二人の女学生がパスポートをもち、横浜港に上陸して、受け入れてくれる学校のあてもなく尋ね歩いて本学を訪れ、たまたま岩瀬キャンパスの玄関先で出会った松本尚先生に温かく迎え入れられたことを機縁とすると聞いています。

その後、入学者は年々増え、修学旅行の沖縄渡航も始まり、今日に至り、これも数人の沖縄県出身の学生が仲間に教えた沖縄舞踊の自然発生的なクラブ活動が、今では部員40余名を数え、本学を代表するクラブの一つに育ちあがりました。アメリカのイェール大学との交流やNHK総合テレビへの出演等々は、この「学園だより」でも紹介されたところです。もっとも、どういう訳か、目下沖縄県出身の学生は誰もいないようで、ちょっと淋しくも感じますが、それもまた面白い現象のようにも思われます。

恐らく、第一期生の方々からご覧になると、本当に隔世の感を深くされるのではないかと思います。

拝啓

南国沖縄の夏は連日うだるような暑さでございます。時折り吹いて来る潮風が少しの涼しさを感じさせてくれます。

御地も気温の変動が激しく体調管理要注意と報じられて居ります。

理事長福井先生には、ますますお元気で東奔西走の御様子、紀子先生よりお伺い致し、何よりと存じ上げます。

一中略一

松本先生の沖縄に対する思いや卒業生の方々の頑張り等々、十余年の歳月の移り変わりについて、関係する皆様方にお伝えしなければと常々考えては居たものの、その策なく今日に至って居りました。

そんな中、「ある卒業生の修養日誌」に出会い、一中略一 突然失礼申し上げる事を承知でペンを執らせて頂いた次第でございました。

松本先生の沖縄に対する「思い」は筆舌に尽くせるものではありませんが、その「思い」

の一端を記させて頂きたいと思っております。

去った大戦で唯一地上戦と言う事もあって、「若い男の先生」「男子師範学徒」「女子師範学徒」その他の「中学校」「女学校」「実業学校」等々の学徒が根こそぎ動員され、多くの命を失いました。結果教育の荒廃はまぬがれず、来県された先生はその状況を目の当たりし、心を痛めておられました。そんな状況下で今自分に手助け出来るものは何かと模索された御様子でした。

今こうして考えてみますと、それが沖縄に対する「思い」の始まりではなかったかと、推察するに具体的には「人材の育成」であったと思っております。

当時の県民の生活は日々の食にも事欠く状況でした。子を持つ親の願いは、子供達に残してやれるものは何もない、せめて教育をほどこしてやれば、何とか食べて行けるのではないかという「親の思い」がありました。

期せずして「松本先生の思い」「親の思い」が重なって、現地試験も実施して頂きました。お陰様で多くの卒業生の輩出となりました。

卒業した皆さんはと申しますと、「今日」今ここに自分があるのは、経済的にきびしいなか、大学へ通わしてくれた父母や家族、受け入れて下さった大学の御指導等々のお陰様であるとの「思い」があります。そして「一日一善和の心をもってなす」を人生の糧に、それぞれの地域や場所、最も大事な家庭で頑張っておられる心やさしい沖縄の強い女の子です。

おわりになりましたが、「三つの思い」が一つになって輪になり、強い「絆」となってがっつりと結びつき、鎌倉女子大学和敬会という親に抱かれて、和敬会沖縄支部として次代を担ってくれるものと信じております。

暑さまだまだ続きます。理事長福井先生、学園主紀子先生にはますますお元気でお過ごし下さいますよう祈願致しております。

—後略—

理事長 福井先生

学園主 紀子先生

※「学園だより」（第165号）掲載記事。

[>前のページへ戻る](#)